

「いんなん」 しています。

わだいのこいん

— 113 —

新制中学校

那智勝浦町宇久井港

読みました。昭和23年2月13日の朝日新聞の記事にはこうあります。

は、熊野灘に面した沿岸に仕掛けた大敷網で有名なです。大敷網からは活きの良い魚が短時間で食卓に上がり、漁師町では「大敷に揚がった魚しか食べない」との声をよく聞きます。ぜひ、たぐな話です。

「東牟婁郡宇久井村の大敷網は昨年十一月末投網以来大漁続きで、一月中にすでに七百万円をあげ、（二月）九日午後二時さらに二貫余のブリが七千尾も入り、村民総がかりでも揚げきれず、翌日、大漁でござた返して

いる矢先、また二千尾も引きかかるといふ有様で同海岸はブリで埋まった（要約）。

この時の水揚げは600万円とのことで、新制中学校の建設費200万円余りはこの水揚げから

漁の豊のブリ



学生の森林保全実習

充当できたとあります。新制中学校は学制改革により昭和22年から設置され、県内では195校がこの年の5月3日に一斉に開校。しかし、戦後間もない頃のため国庫補助金も少なく、ほとんどの学校は校舎が準備できず、小学校に間借りしたり、机も椅子もない床に座って授業を受けたりと建設資金に困窮していました。

久井村の話は、大敷網がもたらした大漁に湧く漁村の豊かき、収益を新制中学校の建設費に充てようと決めた「わが村の教育」への村民の熱い息吹や太っ腹を想像させます。自然の恵みと生活、子の教育が直接的に結び付いていた時代への憧憬すら感じます。

地域のための大学

現在、全国の自治体が取り組む地方創生戦略の2大命題は、人口減を食い止めること、活力を取り戻すこと。地方に若者が少なくなり、それゆえの活力の停滞傾向がいよいよ深刻化してきた今、国は地方創生の基本方針で、この近年40年の負の側面の解決を地方大学

の教育研究現場に託しています。

このため多くの地方大学は地域産業への貢献や学生の地方への就業、定住を促進するというダイレクトな目標を掲げた取り組みを開始しています。



宇久井漁港

政策の枠組みとは別に、和大学の教員らは地域フィールドでの実習授業や地域と協働した研究プロジェクトを行ってきています。その中で地方大学として大切なことは「地域を当事者として見ることが出来る若者」の輩出だと分かりました。よそ事ではなく、当事者として地域を実感し、未来の希望を自力で見つける力を養わない限り、地域における若者の空白は埋めることができません。絵空事の地域の未来図では、そこに住み働くという人生を懸ける決心ができるでしょうか。

当事者とは、ミクロな虫の目で複眼的に地域を見て、さらに上空から社会全体を俯瞰（ふかん）し、空の向こうの未来を構想する鳥の目を持ち、そして実際の行為者となる人のことです。かつての宇久井の浜で繰り広げられた、自然と生活と未来への希望である教育が密接に関わっていた時代が持っていた生の実感。これを取り戻し、地域に関わる生活人を輩出することが、地方創生の第一歩であり最終的な目的であると理解しています。

湯崎真梨子（ゆざき まりこ）

和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授

専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。



プロ
フィル